

て第十三回中賞を受賞している。

『明堂経』は経穴学における最も基本的な書物であるにもかかわらず、原本が今日に伝わっていない。このため、『明堂経』を復元する作業がこれまでも数多く試みられてきた。この作業で大きな問題となる点は、原本に近い本が何種類も存在していたと推定されるため、整理する視点の違いによって、類型の異なるいくつもの『明堂』を復元することが可能となってしまう点にある。

唐の楊上善が注を加えた『黄帝内経明堂』十三巻のうち、第一巻のみが京都の仁和寺と前田育徳会尊経閣文庫に残されているが、本書はこれらを元に、全十三巻の本文の復元を試みたものである。

八年ほど前に桑原陽二氏が『経穴学の古代体系』(續文堂)の中で『黄帝明堂経』の復元を試みており、内容的には本書に近似している。ただし、桑原氏のもとは原『明堂経(三巻)』の復元の試みであり、本書とは目的を異にしている。

復元は緻密さを要する作業である。『甲乙経』、『外台秘要方』、『医心方』などを参考資料として、『明堂』の復元を試みたとしても、資料によって記述が異なる場合、どれを採ったらよいか、まず問題になる。これを決定するには、多くの資料を検討して頭を抱えなければならぬ。そのうち、だんだんと嫌気がさし、資料を山積したまま、仕事は頓挫する。このような経験があるのは私ばかりではなからう。復元作業は労多くして、功少ない仕事である。

本書は小曽戸洋氏ならびに内経医学会の精鋭が頭脳を結集してこの困難な仕事に立ち向かわれて、大きな成果を収められた。諸先生方のご苦勞は如何ばかりであったかと推察される。ところが、本書を開けてみると、その苦勞を全く感じさせない形式になっている。すなわち、復元文の結論のみを示し、諸資料は別にする方法を採っている(小林健二主篇『明堂総覧』CD-ROM)。メンバーの一人、宮川浩也氏は解説文に「本書の副題(針灸医学原典の臨床応用)にも示したように、臨床の面から『明経』を再検討してもらいたい」旨、記している。テキストとして本書を利用してもらいたいとの意図もあって、本書はスッキリした体裁を採ったとみられる。経穴の索引だけにとどまらず、個々の主治症の索引も附して、臨床で検証するのに便宜をはかっている。単に文献学的な研究だけでなく、血の通った平成の『明堂』を完成させたいとの諸氏の熱意が込められている。

(遠藤 次郎)

〔北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所…〒一〇八—〇〇七二 東京都港区白金五—九—一、電話〇三—三四四—六一、四六判、二七七頁、非売品〕

坂出 祥伸 著

『中国思想研究 医薬養生・科学思想篇』

「養生(ようせい)が「病後の養生(ようじょう)」から離れて

「積極的に生を養う」概念として提示発展させられたのは、著者坂出氏によるものである。養生(ようせい)という言葉は、今日では中国の学問をする人だけのものではなく、非常に一般的な用語となった。世間では健康維持の言葉として用いられ、生命思想の上では積極的に人生観を規定する高度な概念となっている。一つの言葉の規定が、これほどまでに大きな影響を与えた例を紹介者は知らない。このことは著者が単なる中国思想や科学技術史の研究者でなく、現代に生きる思想家たる側面をあらわしている。

この本は著者の養生(ようせい)の概念成立に到る背景を伺う研究史として非常に重要な意味を持つ。『中国思想研究』と銘打たれたのは、まさしく医学史と科学技術史研究だけではない思想書としてである。著者は、中国近代思想研究から出発され、科学技術史と道教の研究者として名高い。「序論」で本書に収めた考察のテーマは、中国の科学思想であり、とりわけ医薬思想ないしは養生思想であったことを述べられている。実際には、「気」という中国思想の根底をなしていると考えられる中国固有の観念についての考察であった。近年、著者は「気」の「感応」という概念を用いて思想や医薬養生だけでなく中国文化全体にまで考察を深められている。この言葉も多くの中国研究者の賛同をえるものとなって、研究発表や論文に見うけられる。過去の研究とさらに「気」の概念の新しい研究を展開するためにまとめられた著作である。

この著は三部構成になっている。養生思想篇、医薬思想篇、

科学思想篇である。第一部の養生思想篇には六章の論考が含まれている。「出土医書に見える自然のリズムにもとづく治病・養生」「導引考」「長生術の諸相―導引術・呼吸法・房中術―」「内景図」とその沿革」「陶弘景における服薬・煉丹」「退休文人の養生―衣食住のありかた―」である。どの論考も「気」をキーワードとして考察されたものである。まず自然リズムと身体リズムとの同調性を前提として中国古代の医学と養生術が成り立つことを述べられる。導引が盛んに行われた背景を、不老長生への願望から始まったことを述べ、医家の手から離れて道家の手に移ったという通説を否定的にとらえ、その区別を設けることができないといわれる。このような考察は、道教の研究者としてすでに大家である著者をして初めて可能な発言である。導引術と呼吸法、房中術の目的が長生にあるとした上で、その展開が本来を忘れた方向に変化した時代を明らかにされた。内景図という図像を視点として、その発展が南宋時代以前に遡るものであることを明らかにしている。内景図と体内神の関係なども、今後さらに研究を深めていただきたい方向である。陶弘景は医学と道教をつなぐ重要な人物である。本草と煉丹など、著者ならではの見解が随所に見られる。煉丹の持つ意味を医学史研究者は軽く見がちであるが、ここを理解しないと中国医学史の重要な一面を見逃すことになりかねない。老人の養生とはどうあるべきかを、文人の生活を通じて語られる。第一部は、養生の側面を連続性のあるものとして捉えられていることに、著者の見解

があるように思われる。

第二部は医学文献の研究から始まる。「中藏経」と華蛇の生卒年―『黄帝蝦蟇經』の成書時期について―葛洪の医薬観と『肘後備急方』―孫思邈における医療と道教―孫思邈と仏教―明代『日用類書』医学門について―の六章である。『中藏経』は華蛇の作と伝えられるものであるが後世の人の仮託として世に出たのは北宋末か南宋の初めとされている。『黄帝蝦蟇經』の成書について後漢末から東晋の時代の間と、はじめてその具体的な年代を推定された。葛洪は、また陶弘景に先立つ道教の重要人物である。葛洪の『肘後救卒方』は、『玉函方』百巻の中から三巻にまとめられたものであり、その書名が『肘後備急方』に定着するのは元代以降だとされている。孫思邈もまた道士とされる人であるが、医療と道教の関係について考察し、さらに華嚴経信者としての彼の倫理観を『大医精诚』に求めて、後世への影響の大きさに注意を促している。論説の後ろにつく『孫思邈年譜初稿』は今後の孫思邈研究の基本となる資料である。『日用類書』は日本の学者によって与えられた文献類の名称であり、近世庶民の日常生活のハンドブックといった書物類である。医学門は座右に備えておいて、急場に活用する辞典である。著者は『日用類書』の重要性に早くから気づかれて、これらの古文獻を叢書として出版された。

第三部は、「心と脳の観念―医経を中心として―」「氣」の

感応と修煉―同類相感を中心にして―」「沈括の自然観について」「方以智の思想―質測と通幾をめぐって―」の四章と附章「方以智哲学の概観」である。まず心の主体がどこにあるかという古くて新しい命題に、脳の認識を中心として論じられている。この書物の全体を貫くものが「氣」の考察であることは先に述べたが、その気がどのように現れるかということ「感応」としてである。「同声相应」、「同氣相求む」ものが感応であり、感は動くことで応は報いることであるらしい。感応現象は不可知であり、「氣」と「類」によって関係が規定されている。この同類感応の原型の一つが血縁関係にあり、祖先崇拜にも見いだせる。また「氣」はたんに存在するだけでなく修煉すべき対象であると強調されている。沈括についての論文は、宋代の特異な思想家がどのように自然を見たかという研究である。この研究は、方以智の研究と連続性を持つている。中国での科学思想が、どのように近代の西洋科学思想と異なるのかという命題に沿って論じられている。これらの論文は、著者の研究歴の中で比較的早い時期の研究である。これらの研究から、前半の養生思想と医学思想の研究が導き出されたのである。

中国医学を研究するものも、臨床として応用するものも、「氣」の問題をさけて通ることはできない。しかしその本体は何かと問われたら誰も簡単には答えられない。またなぜこのような医学理論が通用するのかと考えると「感応」としか答えようのない場合も多い。この書はそのような中国医学思

想に疑問を持つ人に、解決の糸口を与えてくれる。さらに医学だけでなく道教、儒教、仏教などまわりの歴史にも配慮した著作である。

この書は旧活字で組まれている。また英語目次と索引が完備している。巻頭の山田慶児氏の「論集に寄せて」も著者をよく知る人として重みを持つ。中国医学に興味を持つ人に、この労作を広く勧めるゆえんである。

(猪飼 祥夫)

(関西大学出版部・千五六四―八六八〇 大阪府吹田市山手町三―三―三五、電話〇六一六三六八―二二一、平成一年九月二十五日、A5判、四三二頁、本体価格七、〇〇〇円)

坂井 建雄 著

『謎の解剖学者ヴェサリウス』

「アンドレアス・ヴェサリウスとは誰か」と訊かれると、「近世解剖学および医学の祖」とか「人体解剖学の歴史的大著ファブリカの著者」と答える人は多からう。

しかし、謎に包まれた彼の生涯やその著ファブリカについては、あまり知られていない。

ヴェサリウスという大学者が、どのような時代的背景の中で、何の因果によって出現したか？ ヴェサリウス以前の解剖学はどのようなものであったか？ 旧態依然たるパリで解剖学を学んだ若十二二歳のヴェサリウスが一五三八年に一挙

に名門パドヴァ大学の教授に抜擢された真相は？ 彼が人体解剖にかけた熱意と努力の源泉と解剖の方法の特色は？

七〇〇頁を超える画期的な大著ファブリカ(一五四三)やその要約ともいふべき名著エピトメ(一五四三)が生まれたいきさつは？ ファブリカやエピトメの内容の詳細は？ 今までの書とは質量ともに格段に異なる素晴らしい図を配し、局所解剖学的な思想(腹部内臓、胸部内臓、頭部臓器)に加えて、画期的な系統解剖学的な思想(骨格、筋肉、血管、神経)を駆使したこの書の出現が、後世の解剖学と医学の進歩に果たした大きな役割は？ この書が革命的といわれた所以は？ このような学問的な革命がヴェサリウスという人物を通して起こった所以は？ ファブリカとそれ以前の解剖書、たとえば、二世紀のガレノス(ペルガモン)、十一世紀のアヴィセンナ(アラビア)、一四世紀のモンテーノ・デ・ルッツィ(イタリア)、一六世紀前半のベレンガリオ・ダ・カルピ(イタリア)などの解剖書との類似点と根本的な相違点は？ ヴェサリウスの書がガレノスを踏襲(とくに血液循環についてはガレノスの思想を脱却していない)しつつも、革命的な書として高く評価される理由は？ 彼の業績が近代の医学や医療の進歩のあり方に及ぼした影響は？ 現在、ファブリカのオリジナルは、世界各国やわが国にどのくらい残存しているのか？ 海賊版や復刻版は？ ヴェサリウスの生い立ち、人となり、生涯は？ 人間の能力、偶然、必然、運命などが世界の歴史や個人の人生に及ぼす不可思議な作用は？